ことばと人間

——新しい言語学への試み——

●

編著者

伊藤　克敏

牧内　勝

本名　信行

三省堂

ことばと人間

――新しい言語学への試み――

編著者

伊藤　克敏

牧内　勝

本名　信行

三省堂

N.D.C. 分類番号 808
A 5 判 488 ページ

ことばと人間

新しい言語学への試み

定価 3,500円

1986年 4 月20日　第1刷発行

©
編著者代表　伊藤克敏／牧内勝／本名信行

発行者　株式会社 三省堂
代表者 上野久徳

発行所　株式会社 三省堂
〒101 東京都千代田区三崎町二丁目22番14号
電話 編集 (03) 230-9411
販売 (03) 230-9412
総務 (03) 230-9511
振替口座 東京 6-54300

(ことばと人間)

落丁本・乱丁本はお取替えいたします　Printed in Japan

ISBN4-385-34988-6

はしがき

「人間は言語によってはじめて人間である」とはドイツの言語哲学者フンボルト（W. Humboldt）の言ですが，現代社会においてことばの重要性がますます高まってきています。

ソシュール（F. de Saussure）に始まる近代言語学は，言語の規則体系（ラング）の記述をその研究対象としてきましたが，今世紀半ばにチョムスキー（N. Chomsky）によって創始された生成言語学は，「理想的話者――聞き手」の言語の普遍的特性や原理を導き出すために，抽象的な言語理論を構築し，ことばの仕組みを解明しつつあります（第Ⅰ部第1章）。

そして，1970年代に入って，社会言語学者ハイムズ（D. Hymes）が，生成言語学の研究対象とする抽象的な「言語能力」(linguistic competence) に対して，それを現実の社会文化的場面で使用できる「伝達能力」(communicative competence) の研究の必要性を唱えて以来，実際の場面におけることばの使用についての研究が盛んになり，「語用論」(pragmatics) の研究が急激な発展を遂げました（第Ⅰ部第5章）。

ソシュールのラングとパロールの二分法に疑問を投げかけ，労働者階級や黒人のダイナミックな言語研究から，日常の話しことばこそことばのダイナミックな構造をとらえる鍵であるとし，統計と変動規則 (variable rules) を言語記述に導入したのがラボブ（W. Labov）でした（第Ⅰ部第4章）。ことばの社会的な面への関心は1970年代に急激に高まり，マイノリティーの抬頭もあって二言語教育，二言語使用の研究がフィッシュマン（J. Fishman）を先頭に盛んになりました（第Ⅱ部第2章）。

コミュニケーションに対する関心の高まりが，身振りや表情によるコミュニケーションへの興味を呼び起こしました。コミュニケーションの7割以上を非言語コミュニケーションが占めているという報告もあり，1950年代からすでにバードウィステル（R. L. Birdwhistell）による「動作学」(kinesics) がありますが，最近では各国の身振り言語の比較研究がかなり進んでいます（第Ⅱ部第6章）。さ

らに，ろう者のことばである「手話」(sign language) の研究が米国で盛んで，米国手話 (ASL) の体系的研究がなされ，音声言語との比較からその特徴が明らかにされています（第Ⅱ部第7章)。

日常生活において私たちは，ことばによって相手をうまく説得したり，場合によっては嘘を言って切り抜けたり，だまされたり，悲喜交々の毎日を過ごしていますが，ことばとその意味との複雑な絡み合いを研究対象とするのがハヤカワ (H. I. Hayakawa) の「一般意味論」で，最近その意義が再認識されつつあります（第Ⅱ部第3章)。これと深い関わりを持つのが「ことば遊び」で，「なぞなぞ遊び」など幼いころから生活に潤いを与えてくれる「ことばの遊戯」の研究は，ことばの社会的研究の重要な部分になっています（第Ⅱ部第5章)。ことばの含蓄的意味の研究で最近注目を集めているのが，「比喩」の研究です。比喩こそ私たちの言語表現に色どりを加え，詩や文学的創作に欠かせないもので，ことばと意味の創造的関係の研究は言語学と文学との接点に関する研究としても注目されています（第Ⅱ部第4章)。

言語と思考の関係についての研究は，サピアーウォーフの言語相対説との関連で，民族言語学や心理言語学で盛んに研究されてきましたが，ことばの普遍性の研究におされ近年やや影が薄くなっているかにみえます。しかし，日英語の発想の違いの研究は，英語の学習や教育に貴重な示唆を与えるものであり，「対照言語学」(contrastive linguistics) はことばと文化の関係も含め，今後さらに研究が深まるでありましょう（第Ⅰ部第6章)。

以上は主としてことばの社会的，文化的側面に関する研究ですが，ことばの心理的，神経的側面についての研究も最近脚光を浴びています。ことばの習得過程の研究と，ことばの産出，理解についての心理的研究は，心理言語学の重要な課題であります（第Ⅰ部第2章)。

心理言語学とかなり密接な関係があるのが，神経言語学で，ことばの神経心理的処理と言語障害との研究を主に扱っています（第Ⅰ部第3章)。

最近，応用心理言語学に「教育言語学」(educational linguistics) と呼ばれる分野が設定されています (Aaronson & Rieber, 1979)。主として学校における読みを中心にした国語教育や外国語教育を扱う，とありますが，もっと広く家庭における母語教育も含めるべきでしょう。ことばの教育の問題は，今後応用心理言語学の重要な課題となるでしょう（第Ⅱ部第1章)。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

以上，最近の言語学の展開と研究分野を，本書の内容との関連で概観してきたのですが，すでにおわかりのように本書は，最近の言語学と関連諸科学の研究成果を踏まえながら，生きたことばの構造，心理，社会，文化の側面，さらに広く非言語的コミュニケーション，手話や言語教育も含め，ことばと人間の関係をトタールにとらえようとしたもので，ことばに対する認識を深め，言語生活をより豊かにするための一助となることを願っています。

本書は，誕生以来10年以上になる「横浜言語と人間研究会」の研究仲間と研究協力者によって企画されたものです。会の生みの親である勇康雄先生，それに発展のために御指導，御協力を賜わった池上嘉彦，日下部文夫，国広哲弥，小泉保，滝沢武久，角田太作，中村敬，中田清一，橋本光郎，比嘉正範，牧野成一，S. J. Chung，F. C. C. Peng の諸先生に心よりの感謝を申し上げたい。なお，三省堂出版局の亀井龍雄氏には大変お世話になりました。記して謝意を表します。

1986年3月

編著者代表
伊藤克敏

目　　次

はしがき …… iii

第Ⅰ部　ことば・心理・社会

第1章　ことばの構造 …… 牧内　勝…… 2

A．音声の構造――――4
1 発声のメカニズム　4　　2 声音表記の方法　7　　3 子音　8
4 母音　10　　5 わたり音・二重母音　12　　6 超分節音　13
7 環境による音声変化　17
B．音韻の構造――――18
1 音声学と音韻論　18　　2 音韻の単位　20　　3 音韻表示と音韻規則　23
C．意味の構造――――26
1 意味論の領域　27　　2 意味論の基本　31　　3 語句の意味　36
4 文の意味　42
D．統辞の構造――――49
1 統辞構造とは何か　49　　2 語の構造　52　　3 文の構造　59

第2章　ことばと心理 …… 伊藤克敏…… 75

A．心理言語学の史的展開――――75
1 ヨーロッパ　75　　2 アメリカ　79
B．心理言語学の分野――――84
1 発達心理言語学　84　　2 実験心理言語学　93
C．おわりに――――106

第3章　ことばと脳 …… 亀井　尚…… 108

A．言語発達からみた脳――――109
B．言語障害(主に失語症)からみた脳――――120
C．類人猿の「言語習得」との関係――――138

第4章　ことばと社会 …… 橋内　武…… 142

A．はじめに――――142
B．社会言語学入門――――142
C．言語の変種――――152
D．社会方言――――154
1 社会階級による違い　155　　2 民族(人種)による違い　161
3 性による違い　164　　4 年齢層や職業などによる違い　168
E．言語使用域――――176
1 言語使用の領域　176　　2 言語使用の媒体　177
3 言語使用の態度　182
F．おわりに――――184

第5章　語 用 論 …… 高原　脩…… 185

A．はじめに――――185
B．語用論とは何か――――189
語用論研究の展開と領域　189
C．言語知識と言語使用――――191
1 言語能力と言語運用　191　　2 語用論的言語伝達能力　191
3 言語使用における世界についての知識　192
D．発話行為――――192
1 表現内的行為と遂行分析　192　　2 間接的発話行為　193
E．会話の分析――――194
1 会話の含意と協調の原則　194
2 会話分析の社会言語学的アプローチ　195
3 会話分析の心理言語学的アプローチ　196
F．言語使用の語用論的機能とコンテクストの役割――――198
1 首尾一貫性のある談話構造の基本的特性としての照応表現　199
2 情報構造と機能主義的言語観　202
G．統語形式の用法に必要な語用論的機能――――206
1 受動態　207　　2 省略　209　　3 否定と焦点　214
4 語順倒置　217

第6章　日英語の発想と表現 …… 沢登春仁…… 221

A．文化面からみた日英語――――221

1 はじめに 221　2「鐘が鳴る」と 'The Bell Tolls' 223
3 'To be free' とは「悟る」こと 225
4『老人と海』にもキリストが 226
B. 表現・構造からみた日英語――228
1 主語のとり方のちがい 228　2 所有表現(英)と存在表現(日) 231
3 受身表現のズレ 232　4 事物の形容の仕方 234
C. 語彙・意味からみた日英語――239
1 水がなければ 'river' ではない 239
2「平和の鳩」は 'dove' それとも 'pigeon'? 240
3「外車」は 'foreign car' ではない 243
4 動詞で答えるコーデリヤ 244
D. 日英語比較研究の動向――246
1 意味・語彙面の対照研究 247　2 文法・統語面の対照研究 248

第II部　ことば・教育・文化

第1章　ことばと教育 …… 伊藤克敏…… 254
A. 母語教育――254
1 ことば以前の教育 254　2 脳とことばの発達 257
3 母親はどのようなことばを子供に与えているのか 258
4 ことばの規則は教えられるか 262
B. 外国語教育のあり方――265
1 応用言語学と外国語教育 265　2 神経言語学と英語教育 269
C. 児童英語教育論――274
1 児童英語教育の意義 274　2 教材と教え方 276
3 発音の指導のあり方 277　4 米国の小学校における外国語教育 278

第2章　アメリカのバイリンガリズムと
バイカルチュラリズム――学校教育のなかで―― …… 本名信行…… 281
A. はじめに――281
B. 人種のるつぼ――281
C. 文化的複合主義――286
D. 英語化教育――289

E．2言語使用教育――――294
F．2言語使用教育の社会的問題点――――300
G．異文化間コミュニケーション――――303
1 価値のシステム　303　　2 社会化のプロセス　305
3 認知のスタイル　306
H．おわりに――――309

第3章　一般意味論　……　横尾信男……　311

A．一般意味論の位置づけ――――311
B．一般意味論の学問的特徴――――313
C．一般意味論の課題――――316
D．非アリストテレス的思考体系――――317
E．一般意味論の基本原理――――319
1 非同一性の原則　320　　2 非全体性の原則　321
3 自己再帰性の原則　321
F．同一視反応――――323
G．外在的工夫――――324
1 指数(index)　324　　2 日付(date)　325　　3 など(etc.)　325
4 引用符(quote)　325　　5 ハイフン(hyphen)　325
H．言語の意味――――326
I．言語の用法――――328
1 通達的用法　329　　2 感化的用法　330　　3 指令的用法　331
4 言語交際　332

第4章　ことばと文学――比喩を中心に――　……　平賀正子……　338

A．文学の言語――――338
1 文学言語・科学言語・日常言語　338
2 言語の詩的機能　341
3 文学言語の形式的特徴　344
B．比　喩――――349
1 比喩の効果　349　　2 比喩の種類　352
C．隠喩の働き――――355
1 隠喩　355　　2 隠喩に関する主要な見方　357
3 隠喩とテキスト解釈　361

第5章 ことばと遊び …… 大木二郎…… 364

A. 遊びとはどのような行動か――――364
1 ホイジンハの遊戯観 365　2 カイヨワの遊戯観 370
3 遊びの非合理性 371　4 遊びと人間 371
B. ことばと遊び――――373
ことばの遊戯的本質 375
C. おわりに――――389

第6章 ノンバーバル・コミュニケーション …… 東山安子…… 391

A. NVC とは――――391
B. 身振りの調査方法――――394
1 データ 394　2 観察方法 395
3 インフォーマントを使った調査方法 396
4 身振りの表示方法 398　5 まとめ 399
C. あいさつの身振り――――400
1 調査目的・資料・調査方法 400　2 調査結果 400
3 あいさつの非言語行動を調査するときのポイント 405
4 日米比較 405
D. 話し手と聞き手の使う非言語行動――――406
1 交替信号の機能と種類 406　2 交替過程 409　3 まとめ 410
E. 文字になった顔の表情の日英比較――――411
1 同じ顔の表情でも言語表現の仕方が異なるために起こる誤解 411
2 同じ顔の表情であるのに，言語化するときに注目する顔の部分が異なるために起こる誤解 412　3 言語表現は似ているのに，意味も実際の顔の表情も異なるために起こる誤解 412　4 同じ意味をもつ顔の表情であるのに，性別や年齢に応じて使い方が異なるために起こる誤解 413　5 文化ごとに特有な顔の表情であるために起こる誤解 414　6 まとめ 415
F. 『身振りの辞書』――――416
1 異文化間におけるコミュニケーション・ギャップと『身振りの辞書』の必要性 417　2 『身振りの辞書』――調査方法・調査項目・実例 419
G. おわりに――――423

第7章 手話入門 …… 神田和幸…… 426

A. 手話は言語か――――426

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1 手話とジェスチュア　426　　2 Sign と Sign Language　428
B．手話の言語的特徴————429
1 写像性　429　　2 同時性と非線条配列　430　　3 可逆性　431
4 方向性と速度・距離　432　　5 反復　434
6 代理詞(SASS)　435　　7 顔の表情　437
C．手話言語学————438
1 手話音韻論　438　　2 手話形態論　440
3 手話の社会言語学的側面　442

注解説 …… 445
参考文献 …… 451
索　引 …… 463

第 I 部

ことば・心理・社会

第1章　ことばの構造

われわれ人間は，普通の知能と環境さえ与えられて育てば，6歳前後までに，親の使用していることば（母語＝mother tongue）の「基本原理」をほぼ完璧に習得してしまいます。世界のどの国の子供でも同じです。だいたい小学校の入学前後までに，普通の知能と環境を与えられて育った子供ならどんな子供でも，周囲で使われている母語の「文」を自由に理解できるし，自分でも自由自在に駆使できるようになります。しかも，家庭・学校・塾などで特別な訓練をいっさい受けなくても，ただ母語に（できるだけ豊かに）「さらされ」てさえいれば，ごく自然に獲得してしまうのです。どんな国のどんな子供でも。このことはあまりにもありふれていて当たり前のように思われ，ほとんど注目されないことですが，振り返って思いを馳せれば，人間にはだれにも等しく，なんとすばらしい，賛嘆してもしきれないほどの「能力」が備わっていることかと，感動しないではいられません。このような事実を「ことばの内在化」(internalization of language) と呼んでいます。ことばの内在化の過程は，脳の発達や，ことば以外の知能の発達などと，きわめて密接な関係にあることが，脳生理学や発達心理学の分野で明らかにされつつあります（今ここでは，母語を「聞く・話す能力」を問題としており，文字による「読む・書く能力」は，関係はありながらも別途に考察する必要がありましょう。また，語彙数や，文の複雑さの程度などは，年齢とともに増すものです)。

上に述べた「内在化されたことば」とは，言い換えれば，母語に関する「知識」(knowledge) だと言えましょう。この母語知識は，母語の話者 (native speakers) の脳裡に蓄えられていて直接観察することができないものであり，同時にまた，母語話者がほとんど意識しないまま使用しているものです。われわれに備わっている，このような暗黙の母語知識を，適切な方法で導き出し，そのありのままの姿を記述したもの（正確には，記述しようと試みたもの）が，まさにその言語の「文法」(grammar) です。文法とは，机上に置いてある文法書のことでもないし，日常使用されている言語の資料だけでもないし，いわんや「暗記もの」

ではありません。読者である「あなた」の脳裡に隠れ潜む母語知識なのです。したがって，この意味での文法は，人間の「心理」に深くかかわっているものです。文法学ないし言語学が，心理学の一部門であり，しかもその中枢部門である，と言われるゆえんは，ここにあります。

母語知識の記述を試みる文法は，母語知識の実体を充分に把握し正確に反映させることが，その理想です。われわれの母語知識と，構築される母語文法とが，完全に一致することです。このような理想を達成することは不可能に近いことでしょうが，一歩でも接近させることが文法の課題です。そのためには，あらゆる科学分野の「理論」(theory) と呼ばれるものがたどる道程と同じように，われわれも，母語について，また言語一般について，「観察」→「仮説」→「検証」のプロセスを繰り返す必要があります。この意味で，当書で説く文法理論も，現時点における一個の仮説である，と言えましょう。

さて，今ここで（第1章で）われわれが特に問題としようとしているのは，ことばが「どのように」(“how”) 習得され内在化されるのか，という言語習得のプロセスではなく，ことばの「何」(“what”) が習得され，どのような基本原理が内在化されるのか，という点です。つまり，ことばの「構造」(structure) とか「仕組み」とか呼ばれるものの実体です（言語習得プロセスについては，第I部第2章を参照)。

「内在化されたことば」(internalized language) は，たとえてみれば，人間の身体のようなもので，一個の有機体を形成していると考えられます。ちょうど身体では，骨・肉・内臓・血液などの要素が密接に作用し依存しあいながら統合されて，一個のまとまり（身体）を作り上げているように，ことばも，音声や意味が文の諸要素と相互に作用し依存しあいながら統合されて，一個の有機体(organism) を形成している，と考えられます。この意味において，われわれは，身体の構造を考察するのと同じように，「ことばの構造」を観察の対象とすることができます。

人間の身体が，それ自体の構造をもっていると同時に，固有の機能を果たしているのと同じように，人間のことばも，それ自体の構造をもっていると同時に，固有の機能 (function) を果たしています。ことばの「心理的・社会的」機能と呼ばれるものがそれです（この機能については後章を参照)。ことばの「構造」と「機能」とは，身体の場合と同様，切っても切れない密接な関係を保っているこ

とも事実です。しかし当面，われわれの焦点を，ことばの「構造」に絞って考察していきましょう。

ことばの構造，ないし文法の構造は，三つの構成部分から成立している，と考えられます。

第一に，「音声・音韻」の部門。ことばは，まず音声です。第二に，「意味」の部門。ことばは，単なる音声ではなく，意味を伴った音声です。第三に，「統辞」の部門。意味を伴った音声は，語彙や文など，いわば「骨格」の部分がなくては存在しません。これら三つの部分が，有機的，相互的に作用し依存しあって「ことば」全体を形成している，と言えましょう。

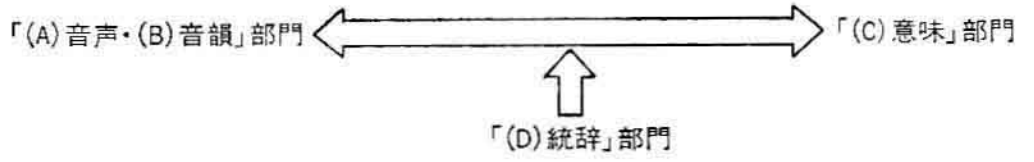

図　1　文法の三部門

以上の順序で「ことばの構造」を考察していきましょう。

A．音声の構造

1　発声のメカニズム

言語音は，たいていの場合，肺から上昇してくる呼気流に，さまざまな発声器官が作用して発声されるものです。また，発声器官の働き方によって，有声音と無声音，口音と鼻音，さらに母音（ぼいん）と子音（しいん），などに大別できる異なった音が生まれます。

a）発声器官

肺の空気は，横隔膜や肋膜など（図2参照）が圧縮されて上昇し，声道を通過して外部に吐き出されます。声道には，連続した四つの発声腔があり，下から，(1)「喉腔（こうこう）」(larynx；気管の上部から声門まで)，(2)「咽腔（いんこう）」(pharynx；声門の上部から口蓋垂（こうがい）の先端まで)，(3)「口腔」(oral cavity；口蓋垂から唇まで)，(4)「鼻腔」(nasal cavity；口蓋垂から鼻口まで）と呼ばれます（以下とも，図3参照)。発声腔は，調音のためと，共鳴音を作るために必要な空洞です。人によって声色（こわいろ）が違うのは，おもに，これらの空洞の大きさや形が異なるた

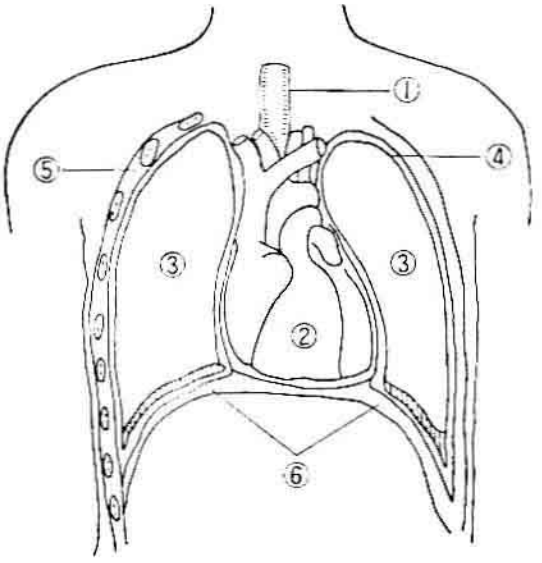

図　2　発声器官(その1)

胸部　①気管　②心臓　③肺　④肋膜　⑤肋骨　⑥横隔膜

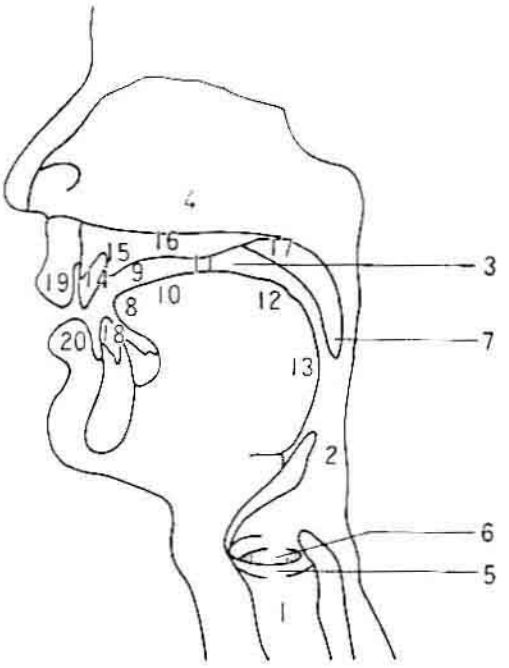

図　3　発声器官(その2)

(1)喉腔　(2)咽腔　(3)口腔　(4)鼻腔　(5)声帯　(6)声門　(7)口蓋垂　(8)舌先　(9)舌葉　(10)前舌　(11)中舌　(12)奥舌　(13)舌根　(14)上歯　(15)歯茎　(16)硬口蓋　(17)軟口蓋　(18)下歯　(19)上唇　(20)下唇

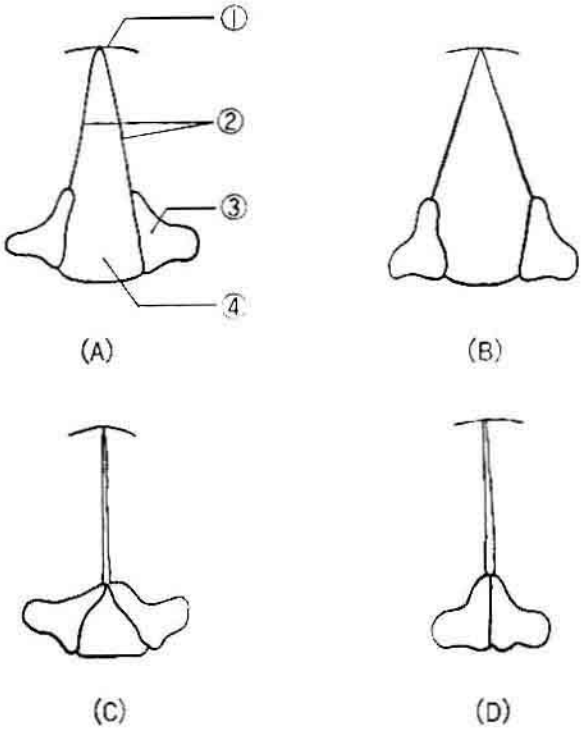

図　4　声帯と声門

①甲状軟骨　(A)呼気
②声帯　(B)吸気
③披裂軟骨　(C)ささやき声
④声門　(D)発声音

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com